

小児期発症炎症性腸疾患患者の理想的なトランジションを目指して

研究分担者 清水俊明 順天堂大学小児科学 教授

研究協力者 熊谷秀規 自治医科大学小児科学 准教授

研究要旨：

小児期発症 IBD 患者のトランジションにおける成人診療科側の問題点や課題を明らかにして、より良い治療と管理が継続されるよう検討し、体制を構築することを目的とする。まずは、成人診療科に対してアンケート調査を行う。その結果を踏まえてマニュアルを作成する予定である。

共同研究者

内田恵一（三重大学小児外科）

国崎玲子（横浜市立大学市民総合医療センター
炎症性腸疾患センター）

杉田 昭（横浜市立市民病院炎症性腸疾患センター）

大塚宜一（順天堂大学小児科・思春期科）

新井勝大（国立成育医療研究センター消化器科）

窪田 満（国立成育医療研究センター総合診療部）

田尻 仁（大阪府立急性期・総合医療センター小児科）

鈴木康夫（東邦大学佐倉病院 消化器内科）

外科）で行われているのか、アンケート調査を行って現状を把握する。

2 年目：アンケート調査からわかったわが国における IBD 患児のトランジションの現状から、海外の現状も参考にしながら理想的なトランジションのマニュアルの作成に着手する。また、小児期発症 IBD 患者のトランジションの現状と課題について、小児 IBD 診療医に対するアンケート調査も計画する。あわせて日本小児栄養消化器肝臓学会が作成した「成人移行期小児炎症性腸疾患患者の自立支援のための手引書」について認知度や利用状況、使用感に関する意見もお伺いする。

3 年目：2 年目に準備していた小児 IBD 診療医に対するアンケート調査を実行する。あわせて「成人移行期小児炎症性腸疾患患者の自立支援のための手引書」の認知度や利用状況、使用感に関する意見もお伺いする。成人診療科のアンケート調査および小児診療科のアンケート調査結果を踏まえ、さらに、海外の動向や国内の他の小児慢性疾病のトランジションの状況を調査しながら、トランジションマニュアルを完成させる。

A. 研究目的

現在、小児期発症 IBD 患者は、小児科医・小児外科医または内科医・外科医によって診療が行われているが、小児診療科医が診ている患者をいつの段階で、またどのような方法で成人診療科医に引き渡す（トランスファー）かは、施設や患者によって様々である。そこで小児期発症 IBD 患者のトランジションの実情を把握し、小児期発症の IBD 患者がより良い治療・管理を継続できるよう検討し、体制を構築することを目的とする。

B. 研究方法

1 年目：小児期発症 IBD 患者のトランスファーが実際どのように成人診療科（内科・

(倫理面への配慮)

アンケート調査項目等、研究にあたっては順天堂大学医学部の倫理委員会で承認を得て実施する。

忍, 乾あやの, 工藤孝広, 窪田 満:
成人移行期小児炎症性疾患患者の自立支援のための手引書: 成人診療科へのスムーズな移行のために. 日小児栄消肝会誌 32; 15-27, 2018.

C. 研究結果

成人診療科を対象としたアンケート調査結果をまとめ、国際学会誌に投稿した。

小児診療科を対象としたアンケート調査用紙案が完成し、倫理委員会で承認を得られ次第調査票を送付する。

2. 学会発表

該当なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

該当なし

D. 考察

成人診療科のアンケート調査結果は、おおむね想定内の結果であったが、小児診療科医との温度差が感じられる部分も見受けられた。こうした乖離を埋めていく作業が必要である。また、小児診療科を対象としたアンケート調査の結果も参考にして、マニュアル作成へ結びつける必要がある。

E. 結論

成人診療科を対象としたアンケート調査の結果から、小児診療科と成人科の連携を強め、診療情報提供書に過不足ない内容を記載することが求められる。また、患者と家族へ、患者の自立に向けた早期からの教育が重要である。

F. 健康危険情報

該当なし。

G. 研究発表

1. 論文発表

Kumagai H, et al. Adult Gastroenterologists' Views on Transitional Care: Results from a Survey (投稿中).

熊谷秀規, 秋山卓士, 虻川大樹, 位田